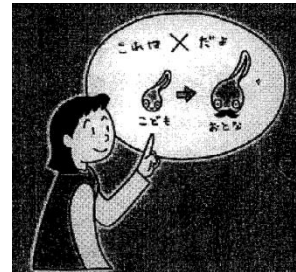


生命と環境

親子あわせ

展示のねらい

昆虫は、何度か脱皮を繰り返し成虫へと成長する。その過程で親と子で姿や形、すみかなどがまったく違うものがある。本展示では、内照式のパネルに描かれた6種類の成虫と幼虫を正しく組み合わせることにより、昆虫の親子のつながりを考える。



■成虫と幼虫の親子あわせ

昆虫は、孵化し幼虫から成虫へと成長する過程で大きな形態変化をする。この時、幼虫から蛹の時期を経て成虫になるのを完全変態、蛹の時期がないのを不完全変態と言い、食べ物やすみかなども大きく変わってくる。本コーナーでは、アゲハチョウ、カブトムシ、オニヤンマ、ゲンジボタル、モンシロチョウ、ヒトスジシマカの6種類の成虫と幼虫を正しく組み合わせることで、昆虫の親子のつながりを理解するものである。

【アゲハチョウ】

アゲハチョウは日本全国の人里近くに生息し、成虫は年に2～5回ほど発生する。幼虫はミカン科の植物の若葉を好む。最初、黒色に白紋のある体をしているが成長するとあざやかな黄緑色に変わる。その後、蛹になって成虫になる。春型の成虫は小型でオス・メスともに外縁の黒い帯が狭く、全体的に明るい色をしている。夏型は一回り大きく、黒色部が発達して、メスの後翅には橙色の紋が現れる。

【カブトムシ】

カブトムシのメスは、8月の中旬ごろから堆肥や腐葉土の中に直径3mm程度の卵をうむ。10日ほどで孵化し、腐った植物質を食べ冬までに2齢→3齢と脱皮

を繰り返し成長する。翌5月ごろ、大きくなった3齢幼虫は蛹室を作り、やがてこの中で動かなくなり前蛹となる。前蛹は2～3週間で脱皮し蛹となる。(オスの蛹には角が生えている。)その後3週間ほどで羽化が始まる。羽化後1～2週間かけからだがか硬くなるのを待ち地上へとはい出てくる。

【オニヤンマ】

オニヤンマは、日本産のトンボのうち最大で、体長が9cm以上にもなる。左右の複眼が一点で接していることで他のトンボと区別ができる。幼虫は水中で生活する。卵から孵化したばかりの前幼虫はエビのような姿をしているが、やがてヤゴと呼ばれる幼虫に変わる。ヤゴは水の底の砂や泥に半ば埋もれて生活し、3～4年かかって成長し、蛹を経ないで成虫になる。

【ゲンジボタル】

日本に棲む最大のホタル。産卵は水辺のコケなどの植物の上や落ち葉などに行う。孵化後、幼虫は水中にもぐりカワニナ(淡水性の巻貝)などを食べて成長し、蛹を経て5～7月に羽化し成虫となる。成虫だけでなく卵や幼虫、蛹も発光する。水田や用水路などをすみかにするヘイケボタルとは異なり、清流を好むため、農薬や河川改修の影響で生息地が減少した。

【モンシロチョウ】

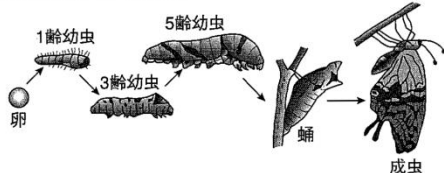
モンシロチョウは、日本のほぼ全土に分布している。成虫は年に6～7回ほど発生する。畑や野原などの明るい開けた環境を好む昆虫である。キャベツや大根などのアブラナ科の植物を好みその葉に卵を産み付ける。孵化した幼虫はその葉を食べて育つことから、幼虫はそれらの害虫としても扱われる。蛹を経て羽化し成虫となる。

【ヒトスジシマカ】

ヒトスジシマカは最も身近なヤブ蚊で東北より南に分布している。体長5mmほどで、体色は黒く胸や肢には白斑がある。池、沼地、湿地帯はもとより雨水マスや空き缶、古タイヤなどの少量の水たまりでも発生する。成虫は5～11月ごろ発生する。幼虫はボウフラとも呼ばれる。蛹(オニボウフラ)を経て成虫になる。

完全変態と不完全変態

完全変態(アゲハチョウ)



不完全変態(トノサマバッタ)

